

『タズキラ・イ・ホージャガン』 日本語訳注 (5)

澤 田 稔

富山大学人文学部紀要第 65 号抜刷

2016年8月

『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注 (5)

澤 田 稔

はじめに

本訳注は『富山大学人文学部紀要』第64号(2016年2月)掲載の『『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注(4)』の続編であり、日本語訳する範囲は底本(D126写本)のp.108/fol.54bの7行目からp.133/fol.67aの11行目までである。本号の内容のあらまは次のとおりである。

ヤルカンドのハーキム(都市長官または行政長官)ガーズイー・ベグは、カシュガル・ホージャ家イスハーク派の重鎮であるホージャ・ジャハーンを策略により自らの屋敷に監禁したものの、出身地のホタンで家族が捕虜にされるなど窮地に立たされた結果、ホージャ・ジャハーンを解放して王座に就け、罪の許しを求める。カシュガルのユースフ・ホージャムは兄のホージャ・ジャハーンが解放されると、アンディジャン方面に援助を求める書簡を送り、カーフィル(不信仰者)たちに対抗する企てを進めるが、重篤な病状となり、カシュガルの統治を息子たちに任せ、父祖の眠る地、ヤルカンドへ移る。

一方、アムルサナーとシナの軍(清朝軍)の進撃を前に、ダバチ(ダワチ)はイラ(イリ)からウシュのほうへ逃れるが、そのハーキムであるホージャ・スィー・ベグに捕縛され、清朝皇帝のもとに送られる。この混乱した状況のもと、アクスのハーキムであるアブド・ワッハーブ・ベグと弟のホージャ・スィー・ベグの献策により、カルマクらは長年囚われの身に置かれていたアフアーク派のホージャたちをカシュガル、ヤルカンドの征服のために利用する。すなわち、ホージャ・アフアークの孫であるホージャ・アフマドの二子、ホージャ・ブルハーン・アッディーンとハーン・ホージャムをその戦列に加える。ハーン・ホージャムはイラに留め置かれたものの、ホージャ・ブルハーン・アッディーンはカルマクやシナなどの部隊を率い、アクスを経てウシュに入る。

このようなカルマクと清朝軍の攻勢に対し、ヤルカンドからウシュに向け遠征軍が派遣される。その出軍の二日後に、ユースフ・ホージャムが逝去する。この遠征軍を率いたホージャ・ヤフヤー(ホージャ・ジャハーンの甥)はカシュガルに入って哀悼の意をしめし、ホージャ・アブド・アッラー(ユースフ・ホージャムの子)がカシュガルの王座に就く。そして、ホージャ・ムーミン(ホージャ・アブド・アッラーの兄弟)がカシュガル軍を率いてウシュへの遠征に加わる。両軍は合流して、ホージャ・ブルハーン・アッディーンがいるウシュの城市に近づく。

日本語訳注

物語の章。聞かなければならない。

さて、ガーズィー・ベグは自分のした行為に恥じ入り、両方〔から〕の懲罰¹⁾を恐れ、どうにも救済策を見いだせないで、神の言葉〔=クルアーン〕を持ってホージャ・ジャハーン・ホージャム猥下のもとに行き、クルアーンにより執り成しを求めて (Qurānī šafī' keltürüp) 泣き、自らの罪〔の赦し〕を乞うた。ホージャムは神の言葉を尊重して、ガーズィー・ベグの罪を見逃した。ガーズィーは泣いて、「おお、我が帝王よ。猥下様により私の心は安らぎを得ている。しかし私は、皇子たちが私に害を及ぼすのではないかと恐れている」と言った。ホージャム猥下は、「そなたは神の言葉により執り成しを求めた (kalām Allāhni šafī' keltürdijiz)。私はそなたに害を与える者に決して同意しない」と言って約束した。ガーズィー・ベグは泣いて神の言葉を胸に置き、「故意に、あるいは誤って、あるいは実際に私が猥下様に対して裏切りをしているならば、残りの我が生涯を猥下様への奉仕に過ごしましょう。私が友人たちには [p. 109 / fol. 55a] 友人、その敵たちには敵とならないならば、この約束を守らないならば、光栄ある神の言葉は私に罰を与えるでしょう」と言って約束した。ホージャム猥下も手にクルアーンを持ち、「私もそなたに対して裏切りはしない。この私の約束に対し、クルアーンが証人となるであろう」と言った。

〔その後〕²⁾、ガーズィー・ベグは会合の部屋 (sorun hāna) をしつらえ、高い王座を置いて鏡で飾り立て (āyina-bandlik qīlip), ホージャムを招いて王座にあがらせ、祝賀のために全てのウラマーやアミールたち³⁾が来た。喜びの太鼓をたたき、全てのヤルクンドのりびと⁴⁾が来て泣き、祝賀して忠誠の誓いの握手をした。その日は幸福のあまり、まるで復活が新たになったように〔大騒ぎ〕であった。そして誰もが泣かざるをえなかった。布告者たちが通りから通りに「時代はイスラームの帝王、ホージャ・ジャハーン・ホージャムの時代」と布告して、魚が河で鳥が空で興奮している〔ように〕戦いの太鼓をたたいている。ホージャ・ジャハーン・ホージャムを馬に乗せてオルダ (宮廷) に下馬させた。統治の王座に確乎となった。その日は三つ

1) ホタンでガーズィー・ベグの親族を捕虜としたスイッディーク・ホージャム (ホージャ・ジャハーンの子) からと、カシュガルのユースフ・ホージャム (ホージャ・ジャハーンの子) からの懲罰を指す。本書 [p. 102 / fol. 51b] ~ [p. 103 / fol. 52a] 「日本語訳注 (4)」101-102 頁参照。

2) ba'dahu. Or. 5338, fol. 58b; Or. 9660, fol. 60b; cf. Or. 9662, fol. 72b による補遺。

3) umarālar. D126 は umarā を 'MRA と綴るが、Or. 5338, fol. 58b; Or. 9660, fol. 60b; Or. 9662, fol. 72b の AMRA による。

4) D126; Or. 5338, fol. 58b は TMAMH YARKND と綴るが、Or. 9660, fol. 60b の tamām Yārkand ahli および Or. 9662, fol. 72b の tamām Yārkand ḥalqī による。

のノウルーズ（新年）が集中した。一つ、その日は年初であった。二つ目はイスラームが広げられたこと。三つ目はホージャムが監禁から解放されたこと⁵⁾。誰もが互いに会えば、その祝賀で握手していた。

さて、ガーズイー・ベグは〔ホージャ・ジャハーン・ホージャムに〕次のように申し上げた。「ユーسف・ホージャム猊下はカシュガルにおいてイスラームを広げている。ヤルカンドに兵を率いる考えらしいという知らせが **[p. 110 / fol. 55b]** あった。ある者 (birāv) [すなわち、ユーسف・ホージャム] に命令が下されるとすれば、イスラームを祝福して兵を率いることを禁ずるならば〔よいでしょう〕。さらにスイッディーク・ホージャムがホタンにお見えになっていた。〔スイッディーク・ホージャムは〕そこに行き、我々の家族を捕虜にして、ウマル・ミールザー⁶⁾を長とするホタンの兵を連れて来ているらしいという知らせがあった。オルダの貴人 (ulug) たちにより、ある者 [すなわち、スイッディーク・ホージャム] に、この喜ばしい知らせをもたらして兵〔を率いること〕を禁じるように勅令 (yarlig) が下されるならば〔よいでしょう〕。ホージャムはこの上申を受け入れ、娘婿 (dāmād) のウマル・ホージャム (‘Umar Hōjam) をカシュガルに向かわせた。ムハンマド・アブド・アッラー・ブカーウルをホタンに向かわせた。

そしてまた〔ガーズイー・ベグは〕「使者のカルマクたちを我々が殺すならば〔よいでしょう〕」と申し上げた。ホージャムは次のように言った。「カーフィル（不信仰者）を戦争以外の時に殺すならば、〔それは〕不当 (nā-ravā) である。そうではなく、そなたたちはカーフィルたちを然るべき状態にして (öz hālīga qoyup), 城市から出すように。兵もまた後ろから追わないように。さらに、我々のムハンマディー・ホージャ (Muḥammadi Hōja)⁷⁾ がイラのなかでカーフィルのあいだにいる。我々がカルマクたちをこれ以上懲罰するならば、彼にとって良くない」と命じた。それから、このカルマクたち一人ひとり (birārdin) に馬を与え、城市から出して追い払った。それから、五百人のカルマクが使者を援助するために来ていた。彼らも彼〔使者〕に加えられ、帰らされた。

さて、ウマル・ホージャはカシュガルに至り、ユーسف・ホージャム・パーディシャーがヤルカンドへ兵を率いるためにカラキル⁸⁾にいることを聞いた。ウマル・ホージャムが来て、喜

5) 本書 **[p. 96 / fol. 48b]** ~ **[p. 97 / fol. 49a]** 「日本語訳注 (4)」96 頁の叙述によると、ホージャ・ジャハーンがガーズイー・ベグの屋敷に招かれ監禁された際も、招待の口実として「ノウルーズ（新年）の見世物」が挙げられているので、監禁から解放までの時日はかなり短かったのであろう。

6) クプチャク・クルグズの首領で、イラからホタンに来ていた。本書 **[p. 70 / fol. 35b]** **[p. 101 / fol. 51a]** 「日本語訳注 (3)」49 頁、「日本語訳注 (4)」100 頁参照。

7) Or. 9660, fol. 61b では Bubāq Muḥammadi Hōja, Or. 9662, fol. 73b では Bubāq Muḥammadi.

8) Qara-qīr (<QRA QYR)。現カシュガル（喀什）市の南方約 9km に位置する疏勒市に当たる（本書 **[p. 83 / fol. 42a]** 「日本語訳注 (4)」86 頁の注 31 参照）。

ばしい知らせを届けた。イスラームを祝福し、[p. 111 / fol. 56a] 敬意を表した。この知らせをユー
スフ・ホージャムが聞き、〔神に〕感謝称賛をした。そしてまた、清めを新たにおこない、感謝、
小沐浴を遂行し、とても喜び、ウマル・ホージャムを客としてもてなし、退去の許可を与えた。

さて、ムハンマド⁹⁾・アブド・アッラー・ブカーウルは迅速に進み、ホタンに至っていた。途中、
スイッディーク・ホージャムが兵とともに来ていた。彼と出会った。〔ムハンマド・アブド・アッ
ラー・ブカーウルは〕ヤルカンドのなかで起きた出来事を説明した。ガーズイー・ベグの妻子
に危害を加えないように書付を示した。しかし、〔スイッディーク・ホージャムは〕ムハンマド・
アブド・アッラー・ブカーウルの言葉を信じなかった。そのみならず、「そなたたちは〔ホー
ジャ・ジャハーン・〕ホージャムを策略によりガーズイー・ベグの家に連れて行き、まさにこ
の事件を生じさせた。今そなたは、まさにその事に足を踏み入れている。ガーズイー・ベグの
妻子を、書付をこしらえて我々から解放し、さらに〔我々に〕圧迫を加えるであろう」と非難
した。シハブ・アッディーン・ブカーウル (Šihāb al-Dīn Bukāvul)¹⁰⁾ は〔ムハンマド・アブド・
アッラー・ブカーウルに〕危害を加えることを望んだ。スイッディーク・ホージャムは危害を
認めず、「偉大な我が父の家僕 (ḥādīm) に危害を加えることは良くない。まさに処罰はあとで
〔おこない〕、一頭の痩せた馬に乗せ、人をつけず、独りで兵の後ろから進ませよ」と命じた。

ムハンマド・アブド・アッラー・ブカーウルはいろいろと苦勞をしながら道を進んでいる。
グマ¹¹⁾ に至ったときに、ヤルカンドのアーラム (a'lam, 最上位の学者)、アーホン・ウマル・パー
キー (Āḥvun 'Umar Bāqī) がスイッディーク・ホージャムを出迎え、起きた出来事を説明し、ガ
ーズイー・ベグの妻子のために捺印された書付を示した。[p. 112 / fol. 56b] しかし、〔スイッディ
ーク・ホージャムは〕このアーホンの言葉も信じず、ためらわざるをえなかった (taradduddin¹²⁾
čiqmadīlar)。次のように言った。「ガーズイー・ベグはそれに関してとても詭計に満ちた悪賢
い人である。〔ガーズイー・ベグが〕アーホンのもとに難を避けているならば、〔それは〕仕方
なくその約束を受け入れて来ている〔だけである〕。今、印章の信頼性はない。偉大な我が父

9) D126; Or. 5338, fol. 59b は Muḥammadī と記すが、Or. 9662, fol. 73b の Muḥammad による。なお、
本書前述の箇所 [p. 110 / fol. 55b] では Muḥammad と記されている。

10) D126 は ŠHAV DYN BKAVL と綴るが、Or. 5338, fol. 59b; Or. 9660, fol. 62a; Or. 9662, fol. 74a の
ŠHAB ALDYN BKAVL による。

11) Gümā (<KVMA)。Or. 9662, fol. 74a は KVMAH と綴る。ホタンとヤルカンドの中間に位置し、ホ
タンから西北西約 150km にある Guma Bazar に相当しよう (Sven Hedin, *Central Asia Atlas* (The
Sino-Swedish Expedition, Publication 47, I. Geography, 1), Stockholm: Statens Etnografiska Museum,
1966, NJ44 の地図参照)。

12) D126; Or. 5338, fol. 60a は TRD, Or. 9660, fol. 62a は TRDVD と綴るが、文脈により taraddud と
読む。

は敵¹³⁾の手中に捕らわれている。印章もまた敵の手中にある」と言っ、アーホンの言葉を受け入れなかった。

その後、ヤルカンドの城市の前に来た。国の人びとがみな出迎えている。この御方〔スイッディーク・ホージャム〕¹⁴⁾の〔心〕¹⁵⁾は安らいでいない。結局、ウマル・ミールザーが城市に遣わされ、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下が統治の王座に坐っているのを見て来て知らせた後に、この御方の心は安らいだ。〔スイッディーク・ホージャムは〕城市に入った。ホージャ・シャムス・アッディーン・ホージャム¹⁶⁾、ホージャ・スイッディーク・ホージャムをはじめウマル・ミールザー、ホタンの兵の司令官たちはみな贈り物¹⁷⁾をもって入り、敬意を表し、イスラームを祝福して〔ホージャ・ジャハーン・〕ホージャムの足元にひざまずき¹⁸⁾、号泣していた。ホージャムは彼らを慰撫し、大いに恩寵を示した。スイッディーク・ホージャムは〔神を〕称賛して頌詩(カスイーダ)を作っていた。その頌詩にホージャムは眼を通した。頌詩は次のとおり。

おお、そなたの属性よ、〔陸と〕¹⁹⁾海²⁰⁾は際限なく、また果てしない

そなたの本質のごとき以外は永続しない

[p. 113 / fol. 57a] そなたは外面で内面であるのか、それとも、最初で最後なのか

そなたの清らかな本質²¹⁾は、不注意ゆえに、我々に明かでない

おお、神の使徒よ、すべての被造物はそなたの寄食者²²⁾となった

預言者ムハンマドの徴(āyat-i lawlāka²³⁾)がそなたにとって証人である、おお、幸福な者よ

そなたの顔と巻き毛の形容を思い起こしてから、栄光高き神

<夜にかけて>と<白昼にかけて>の章〔『クルアーン』92〕が下された

13) D126; Or. 5338, fol. 60a; Or. 9660, fol. 62b; Or. 9662, fol. 74b は DVŠMN と綴るが、dušman と読む。

14) Or. 5338, fol. 60a による補遺。

15) Or. 5338, fol. 60a; Or. 9660, fol. 62b による補遺。

16) ホージャ・ジャハーンの末弟ホージャ・アブド・アッラーの長子でホタンに配置されていた(本書 [p. 65 / fol. 33a]「日本語訳注(3)」44頁、本書 [p. 101 / fol. 51a]「日本語訳注(4)」100頁参照)。

17) D126 は BŠ KŠ と綴るが、Or. 9660, fol. 62b の PYŠ KŠ により pīš-kaš と読む。

18) D126 は YGLB と綴るが、Or. 5338, fol. 60b の YQLYB, Or. 9660, fol. 62b の YQYLB, Or. 9662, fol. 74b の YQYLYB により yīqīlīp と読む。

19) barr vā. Or. 9660, fol. 62b; Or. 9662, fol. 74b による補遺。

20) D126; Or. 9660, fol. 62b; Or. 9662, fol. 74b は BHR と綴るが、A グループ写本の D191, fol. 103a; ms. 3357, fol. 133a の BĤR により baĥr と読む。

21) D126 は ZRAT と綴るが、Or. 9660, fol. 63a; Or. 9662, fol. 75a の DVR ZAT により dur zāt-i と読む。

22) D126 は TVFYLNK, Or. 5338, fol. 60b は TVFYNYK, Or. 9662, fol. 75a は TVFYLYNK と綴るが、Or. 9660, fol. 63a の ṬFYLYNK により ṭufaylīṭ と読む。

23) D126 は LVK と綴るが、Or. 5338, fol. 60b; Or. 9660, fol. 63a; Or. 9662, fol. 75a の LVLAK による。

<おお、衣をかぶる者〔預言者ムハンマド〕よ>〔『クルアーン』73-1〕、そなたの清らかな本質に呼び掛け²⁴⁾があった

<両世界に慈悲がありますように>も思い起こす、もう一度²⁵⁾

おお、執り成す者よ、翌日、執り成しの座にそなたが坐るならば

そなたの反逆の手を私のように辱めないだろう

最初にアブー・バクル・スィッディーク (Bū Bakrī Ṣiddīq) が宗教を信じた

ヒジュラ (聖遷) の時、洞窟の友〔アブー・バクル・スィッディーク〕だけが猓下と共にあった

正義の部門においてファールーク (Fārūq)〔第2代正統カリフのウマル〕は世界で唯一彼がいなければ、ムハンマドの聖法は明らかにならなかった

神の宗教の称賛には、二つの光の持ち主〔第3代正統カリフのウスマーン〕が必要知識と寛容の源泉、鋳物の雨 (?), 威厳の持ち主

シャー・ハイダル (Šāh Ḥaydar)〔第4代正統カリフのアリー〕の威信において猓下はなんと喜ばしかったことか

<アリー (‘Alī) 以外に若者なし、ズルフィカール (zū al-fiqār)〔アリーの名刀〕以外に剣なし>

シャー・ハサン猓下 (Ḥaḍrat-i Šāh Ḥasan) が毒を口にして殉教した

この殉教に、邪悪なヤズィード (Yazīd)〔ウマイヤ朝の第2代カリフ〕が原因となった

[p. 114 / fol. 57b] シャー・フサイン猓下 (Ḥaḍrat-i Šāh Ḥusayn) がカルバラー (Karbālā) の殉教者となった

スンナの民 (ahl-i sunnat) の前でハワーリジュ派 (ḥawārij) は辛酸をなめた

この二人の王子に、このような苦痛は及んでいなかった

養育者 (神, parvardigār) はここにおいて沢山の叡智を顕わにした

その一人は、翌日、諸ウンマ (ummatlar) に対し執り成す者となるだろう

その一人は、この世界において名高い殉教者となるだろう

彼 (神) は全知である、神が正しく最もよく知りたまう

私のような名高い者はほかの叡智をいかに知ろうか

苦勞しない限り、喜びの王座は望ましくない

神 (kirdigār) は悲哀と安樂を対にして創造した

24) nidā. D126 は NDAR と綴るが、Or. 5338, fol. 60b; Or. 9660, fol. 63a; Or. 9662, fol. 75a の NDA による。

25) bir vā bār と読み、「もう一度」と解した。

アルシー (‘Aršī) ²⁶⁾ よ、王よ、王たちの王よ、そなたに悲哀がおよばないならば
 イスラームの宗教²⁷⁾ は明らかにならなかった、おお、君主 (šahriyār) よ
 悲哀に包まれた²⁸⁾ 心が、そなたの慈悲により再び喜んだ
 バラがしおれて、眼の季節において早春がはじまったようだ
 おお、フトゥーヒー (Futūhī) ²⁹⁾ よ、感謝しない限り、自分の状況を知れ
 数日、私の眼に³⁰⁾ 洗眼剤が友と故郷 (yār u diyār) になった

それから、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下は次のように話した。「おお、子よ。イマーム・ハサン猊下が毒を口にしたことを、イマーム・フサイン猊下<神が彼を嘉せられますように>がカルバラで殉教者となったことを、そなたは説明している。そなた自身に起きている出来事を、[p. 115 / fol. 58a] そなたはどんな言葉で表現するのか」と言って、眼から涙を流した。すべての人が泣いた。ホージャム・パーディシャー猊下はまた皆の心を慰め、爽快に説明した。その後、ホタンから来た軍の司令官たちに好意を示して帝王にふさわしい賜衣を与え、客もてなしの宴をしてホージャ・シャムス・アッディーン・ホージャムをはじめホタンの兵に退去の許可³¹⁾ を与えた。ウマル・ミールザーを王国全体の宰相 (wazīr³²⁾ jumlat al-mulk) にして、ガーズィー・ベグの息子³³⁾ ウマル・ベグを再びホタンのハーキムにして送り出した。その後、[猊下] 自身はヤルカンドの統治の王座に確乎となり、司法と審判 (dād sorāglārī) を聖法 (シャリーア)

26) Nurmanova 氏によると、ジャハーン・ホージャムの筆名である (Aytjan Nurmanova, *Qazaqstan Tarikhi Turali Türk Derektmeleri IV tom. Mükhammed-Sadiq Qashghari, Tazkira-yi ‘azizan*, Almatī: Dayk-Press, 2006, p. 173, footnote 269)。

27) Or. 9660, fol. 63b; Or. 9662, fol. 75b により dīn (宗教) を補う。

28) sarulğan. D126 は SARVALĠAN と綴るが, Or. 5338, fol. 61a; Or. 9660, fol. 63b の SARVLĠAN による。

29) D126 は FTVHY と綴るが, Or. 5338, fol. 61a; Or. 9660, fol. 63b; Or. 9662, fol. 75b の FTVHY による。なおフトゥーヒーは、スイッディーク・ホージャムの筆名である (Aytjan Nurmanova, op. cit., p. 173, footnote 270 および本書 [p. 57 / fol. 29a] 「日本語訳注 (3)」36 頁の本文を参照)。

30) közümgä. Or. 9660, fol. 63b; Or. 9662, fol. 75b は「そなたの眼に (közümgä)」と記すが, D126; Or. 5338, fol. 61a による。

31) ruḥṣat. D126 は RVḤṢT と綴るが, Or. 5338, fol. 61a; Or. 9660, fol. 63b; Or. 9662, fol. 76a の RḤṢT による。

32) ハルトマン氏の表記に従い、wazīr-i としない (Martin Hartmann, “Ein Heiligenstaat im Islam: Das Ende der Caghataiden und die Herrschaft der Choğas in Kašgarien.” *Der Islamische Orient. Berichte und Forschungen*, Pts. 6-10, Berlin: Wolf Peiser Verlag, 1905, p. 250 参照)。

33) oġli. D126 は AV‘LY と綴るが, Or. 5338, fol. 61b; Or. 9660, fol. 64a; Or. 9662, fol. 76a の AVĠLY による。

の命令で治め、讃えられるべき至高なる神に感謝称賛し、常にウラマーたちと宴席を設けて³⁴⁾ 信仰に勤しんだ。

物語の章。ユースフ・ホージャム・パーディシャーについて聞かなければならない。

ユースフ・ホージャム・パーディシャーはヤルカンド、カシュガルの仕事から〔解放され、諸事件の懸念に対し〕³⁵⁾ 心を平静にして、ダルヴィーシュ・ブカーウル (Darvīš Bukāvul) をアンディジャン (Andijān) に遣わした。次のように書状を書いた。「おお、アンディジャン諸州のハーキムたち (Andijān wilāyatlarīnīñ hākīmlāri) よ、このモグーリスタン (Mōgūlistān) の諸城市を、何年も数えきれないほどの世代において、カーフィルたちは支配したようだ。このカーフィルたちの暴虐圧制はムスリムたちにとって限度を超えていた。<神に称賛あれ>、我々は神の援助があり、イスラームの宗教を開放 **[p. 116 / fol. 58b]** した。そして、彼らから顔をそむけ、拒むことなく³⁶⁾ 剣を抜いた。讃えられるべき至高なる神様に次のように希望している。我々はイラに兵を率い、ムスリムたちの積年の恨みをカーフィルから晴らさなければならぬ。そなたたちも力を発揮してイスラームに助力するように。書状を終える。平安あれかし」。

そしてまた、アンディジャンのクルグズたちの首領 (Andijān Qirgizlarīnīñ sardārlāri) に、〔すなわち〕クバード・ミールザー (Qubād Mīrzā) を完璧な勇敢さゆえにバハードゥル・ビヤ (Bahādur Biya³⁷⁾) と名付けているが³⁸⁾、彼にも次のように書状を書いた。「おお、クバード・ミールザーよ。そなたの父祖 (ata baba) は我々の祖先に対し弟子・信奉者 (murīd muhliṣ) となってきた。

34) mašrab tüzüp. Or. 9660, fol. 64a; Or. 9662, fol. 76a では šuḥbat tüzüp (法話の席を設けて)。

35) fāriḡ bolup ḥawādiṣāt tašwīšlarīdīn. Or. 9660, fol. 64a による補遺。

36) bī-ibā. D126; Or. 5338, fol. 61b は BY AYBA と綴るが、Or. 9660, fol. 64a; Or. 9662, fol. 76b の BY ABA による。

37) D126; Or. 9660, fol. 64b の綴り BYH によるが、Biya の読みは不確定である。

38) A グループ写本の Turk d. 20, fol. 92a は、「クシュチ氏族 (Qūšči uruḡi) のクルグズたちの首領クバート・ミールザー (Qubāt Mīrzā), すなわち彼を完璧な勇敢さによりバハードゥル・ビー (Bahādur Biy) と名付けていた」(Cf. D191, fol. 104b-105a; ms. 3357, fol. 136a) と記す。D191 写本と ms. 3357 写本はクバートの名を QVT と綴り、前者には発音記号のシャッドが付されており、Quwwat と読める。なお、Nurmanova 氏は D191 写本の kamāl šujā'atdīn (完璧な勇敢さにより) を固有名詞の一部とみなし、カマル・シュジャー・アッディーン・バハードゥル・ビーとする (Aytjan Nurmanova, *op. cit.*, p. 174) が、従えない。

特に〔そなたの父〕³⁹⁾ ガルチャ・ビヤ (Ġālča⁴⁰⁾ Biya) はホージャ・ハサン (Hōja Hasan)⁴¹⁾ <彼の上に〔神の〕満足がありますように>の時に総司令官 (sipah-sālār) となり、この呪われた者〔カーフィル〕の本道⁴²⁾を何度もさえぎり、打ち懲らしめた。そなたも選択して、この一族のもとにお越しになるならば⁴³⁾、現世と来世において名誉を得ることとなり、聖戦士 (ġāzī) たちの隊列において台頭するであろう。書状を終える」。

そしてまた、ホージャ・ハサン<彼の上に〔神の〕満足がありますように>の門弟たち (yārānlar) のうちアーホン・ムッラー・マスジディー (Āḥvun Mullā Masjidi) とアーホンド・ムッラー・ナウルズイー (Āḥvund Mullā Navrūzi) をはじめ弟子・信奉者たちはアンディジャン〔諸州〕⁴⁴⁾にいたが、彼らに書状を書いた。すなわち、「おお、我が偉大な親戚の門弟たちよ。そなたもまた、数年来、栄光ある祖国・家が荒廃して、さすらっていた。まさにこのカーフィルたちのせいで。<神に称賛あれ>、我々はこのカーフィルたちを混乱させ、この地方をカーフィルたちから **[p. 117 / fol. 59a]** 解放した。そなたたちはこれらの地方にお越しになり、イスラームに助力することが必要である。書状を終える。平安あれかし」。要するに、これらの書状をダルヴィーシュ・ブカーウルによりアンディジャンに送った。

物語の章。聞かなければならない。

ユースフ・ホージャム猥下に一人の夫人 (haram)⁴⁵⁾ がおり、ジャミーラ・アガチャム (Jamīla Aġaçam) と名づけられていた。とても美しく、明敏で賢い人であった。ユースフ・ホージャム・パーディシャーがイラにいたとき、ジャミーラ・アガチャムは同行していた。イラからカシュガルにお越しになったときも同行して来て、アクスに留まっていた。一緒に〔カシュガルに〕来る機会に恵まれなかった。ホージャムがカシュガルに連れて来させるために急行軍⁴⁶⁾を送っ

39) ataŋiz. Or. 9660, fol. 64b; Or. 9662, fol. 76b による補遺。

40) D126 は 'ALJH と綴るが、Or. 9660, fol. 64b; Or. 9662, fol. 76b の ĠALJH による。

41) この人物は、アーファーク派のホージャ・アーファークの息子（または孫）にあたるホージャ・ハサンである可能性が高い。そのホージャ・ハサンについては、本書 **[p. 39 / fol. 20a]** 「日本語訳注 (2)」103 頁の本文および注 87 を参照。また、その伝記について、河原弥生「『ホージャ・ハサン・サーヒブキラーン伝』フェルガナ盆地における民間所蔵史料の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』71 号、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2006 年、205-257 頁参照。

42) sar-i rāh. D126 は SD RAH と綴るが、Or. 5338, fol. 62a; Or. 9660, fol. 64b の SR RAH による。

43) bu qabīlagā tašrīf keltürsānjiz. Or. 9660, fol. 64b では「そなたの一族とともにお越しになるならば (qabīlalarīŋiz birlä kelip tašrīf qilsanjiz)」, Or. 9662, fol. 76b では「そなたの民とともにお越しになるならば (ḥalqīŋiz birlä tašrīf keltürsānjiz)」と記され、文意が異なる。

44) Or. 9660, fol. 64b の Andjān wilāyatları による補遺。

45) Or. 9660, fol. 65a; Or. 9662, fol. 77a では「敬虔な妻 (zauja-i šāliḥ / šāliḥa)」とする。

46) ilġar. D126 は ALĠRA と綴るが、Or. 5338, fol. 62b の AYLĠAR による。

たときに、アブド・アルワッハーブ・ベグ⁴⁷⁾はこの時を好機とみなし、この方〔ジャミーラ・アガチャム〕にねらいを定めた。この方は屋敷(ハウリ)に閉じ込められ(qabalīp), 数日戦い合った。

アクスの金庫係り⁴⁸⁾のミールザー・カーシム・ベグ (Mīrzā Qāsim Beg) という者がおり、ミールザー・ムラード・ベグ (Mīrzā Murād Beg), ミールザー・シールダーク・ベグ (Mīrzā Šīrdāq Beg) という二人の弟がおり、〔彼らは〕一門の弟子 (ムリード) の出であった⁴⁹⁾。結局、ある夜に好機とみなして、ジャミーラ・アガチャ⁵⁰⁾〔ジャミーラ・アガチャム〕を無事に〔救出して〕ウシュ (Ūš)⁵¹⁾ 城市の道によりカシュガルの方へ向かった。至高なる神はアブド・ワッハーブの兵に不注意をおこさせた。この者たちの援助により〔ジャミーラ・アガチャは〕カシュガルにお越しになった。城市の人びとが出迎え、敬意を表してオルダ (宮廷) に下馬させた。ユースフ・ホージャム猊下はこの者たちの尽力を [p. 118 / fol. 59b] 称賛して、ただただ喜び、数日、宴会をもよおして歓楽にふけた。この同行して来た者たちに王にふさわしい衣服、帝王にふさわしい賜衣を授け、客としてもてなして帰らせた。その後、彼自ら〔ハニム (夫人) とともに〕⁵²⁾ 歓楽に過ごした⁵³⁾。

暫くの間、このように人生を過ごした。ヤルカンド、カシュガル、ホタン、この三つの城市においてイスラームは開放され、安寧が保たれた。その後、ユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下の祝福された身体に腫瘍 (varam) が現れた。医師たちは治療薬に頼った。しかし、ユースフ・ホージャム猊下は明敏さの光により、この病気が回復の方に向いていないことを明らかにした。そして喜捨 (サダカ) に眼を向けた⁵⁴⁾。豊富な世俗の物により〔施し・恩恵を示し〕⁵⁵⁾、神の使徒〔預言者ムハンマド〕を追悼するために全『クルアーン』を朗詠した (dunyā-yi farāvān birlā ḥatm-i rasūl Allāh oqudīlar)。すべてのウラマーたちで一杯になった。その後、〔ユースフ・ホージャム猊下は〕

47) アブド・アルワッハーブ・ベグはアクスのハーキムであり、本号で後述されるウシュのハーキム、ホージャ・スィー・ベグの兄弟でもある。本書 [p. 66 / fol. 33b] 「日本語訳注 (3)」44-45 頁の本文および注 73 参照。なお、アブド・アルワッハーブ・ベグは本書においてアブド・ワッハーブ・ベグとも表記されている。

48) ḥazīnači. D126 は ĠZYNHJY と綴るが、Or. 9662, fol. 77b の ḤZYNHJY による。

49) ḥānadān murīdīlarīdīn erdi. Or. 9660, fol. 65a は「ホージャム猊下の一門の出であった (Ḥaḍrat-i Ḥvājammīnī ḥānadānlarīdīn erdi)」と記す。

50) Aḡača. D126 は AĠA と綴るが、Or. 5338, fol. 62b の AĠAJH による。

51) 本書の別の箇所 ([p. 66 / fol. 33b] など) ではウチュ (Ūč) と表記されている。

52) Ḥanīm bilā. Or. 9660, fol. 65b による補遺。

53) ‘ayš ‘išratkā tüzaldīlar. D126 は最後の語を TVLZALDYLAR と綴るが、Or. 5338, fol. 63a の TVZALDYLAR による。

54) nazārī šadaqa berdilār.

55) ḥayr iḥsān qıldīlar. Or. 9662, fol. 78a の欄外書き込みによる補遺。

スフ・] ホージャムはこのウラマーたちに、「おお、ウラマーたちよ、よい耳で聞きなさい。我が寿命は終末に達している。いかに治療をしても、効果がない」と言った。ウラマーたちは良き祈りをして、泣きながら、[ホージャムの]⁵⁶⁾心を慰めるために『クルアーン』の諸節とハディースを説明して治癒を求めた。

しかし、病状は日々進行して腫瘍が胸に達した。健康回復の兆候はなかった。ホージャムは懸念して、「わが父祖たちの足もとに私自身が身体を持って [p. 119 / fol. 60a] 行くほうがよい。炎暑の気候のもと身体を背負い〔運ぶ〕ことは難しい」と言い、「国の人びと皆に集まるよう指示せよ」と命じた。そしてさらに、「そなたたちは盛大な食事 (uluğ aš) をするように」と命じた。すべてのウラマーとアミールたち、国の人びとが集まった。豊富な料理をならべた。食事を終えて、[ホージャムは] この一団に次のように話し掛けた。「おお、門弟たち (yārānlar) よ、今日は別離の日である。多年にわたり⁵⁷⁾、私はそなたたちとともに法話 (şuḥbat) をしていた。我々は食事の権利 (ḥaqqī ta‘ām), 言葉の権利 (ḥaqqī kalām⁵⁸⁾) [を持つ者] になった。私は今、そなたたちに懇願する。すなわち、そなたたち各々の心が意図的に、あるいは誤って私のために痛むならば、そなたたちは神のために見過ごすように。そして、そなたたちは私に満足するように。私には今、良くなる〔きざし〕がない。我が身体を我が父祖たちの足もとに私自身が持って行かねばならない。そなたたちは私の地位において我が息子、ホージャ・アブド・アッラーを見るであろう」と言って、息子たちを神と預言者に委ねて別れを告げあつた。

この一団から嘆き叫ぶ声が上がった。誰も平静を保てなかった。一時のち、皆は謙虚に次のように申し上げた。「おお、世界の帝王よ、至高なる神は祝福された身体に治癒を授けるであろう。我々は皆、卑小な奴僕である。我々の首において猊下の諸権利は我々の一本の毛髪よりも多いのである。猊下の満足は我々にとって両[p. 120 / fol. 60b]世界の資産なのである」と言って、泣き悲しみながら郷里 (waṭan) に戻った。

さて、ユースフ・ホージャムはホージャ・アブド・アッラーとともにホージャ・ムーミン⁵⁹⁾

56) Or. 9660, fol. 65b の「ホージャムの心を慰めた (Ḥvājamga tasallī ḥāṭir berdīlār)」による補遺。

57) sālhā-yi sāl. D126 は語末の sāl に抹消線を引いているが、誤りである。

58) D126 は KLAB と綴るが、Or. 5338, fol. 63b; Or. 9660, fol. 66a; Or. 9662, fol. 78b の KLAM による。

59) Ḥōja Mu‘min. D126; Or. 5338, fol. 64a; Or. 9660, fol. 66b; Or. 9662, fol. 79a は MV‘MYN (Mu‘mīn) と誤記するが、Mu‘min が正しい。以後、この誤記については注記しない。なお、ホージャ・アブド・アッラーとホージャ・ムーミンはともにホージャ・ユースフの子である (本書 [p. 69 / fol. 35a] 「日本語訳注 (3)」48 頁参照)

をカシュガルの統治の王座に据え、居住を命じた。さらに二人の愛児⁶⁰⁾は小さかったが、彼らを自分自身に同行させ、家僕・属人たち (ḥādim tābi‘lar) を、〔一部を〕⁶¹⁾行くことに、一部を留まることに定め、旅の用品を準備して支度ができた。国の人びとは皆、別離のためについて行った。〔ユースフ・ホージャムは〕一部の者にここで、一部の者にあそこでと退去の許可を与えた。

さて、〔ユースフ・ホージャムは〕ホージャ・アブド・アッラーとともにホージャ・ムーミンの額にキスをして眼に涙を浮かべ、次のように言った。「おお、我が愛児たちよ。私はそなたたちを神と預言者に、偉大な我が父祖に委ねた。面会は復活の日に残された。そなたたちはこの強敵 (qalīn dušman⁶²⁾) たちの間でどのような難儀に直面するのか、そなたたちは私の悲嘆悲運を引き受けるのかどうか、あるいは、そなたたち自身にふりかかる不幸災難〔に〕⁶³⁾驚くのか、そなたたちは家が荒廃してどのように放浪するのか、今やまさに、そなたたちにとって悲嘆悲運の始めである。

詩

我が仲間、ああ、朋友、親友よ、苦痛悲しみは親友
 苦労は四方八方、おお、陽気な者よ、秩序はそのようになるべき
 まだその最初は愛であり、悲しみの傷痕をより少なくせよ
 すなわち、その暴風は恥辱であり、世界征服者がなした

【p. 121 / fol. 61a】 別離の日であり、今や眼に涙して悲しむな
 そなたたちは今日、誰から別れるのか知っているのか

さて、ユースフ・ホージャム・パーディシャー猯下は子たちに退去の許可⁶⁴⁾を与え、<神の

60) A グループ写本の D191, fol. 107a-b; ms. 3357, fol. 141a-b; Cf. Turk d. 20, fol. 94b は二人の愛児の名前、ホージャ・クトブ・アッディーン猯下とホージャ・ブルハーン・アッディーン猯下 (エルケ・ホージャ) を記している。この二人がユースフ・ホージャムの第三子と第四子であることは、本書 **【p. 69 / fol. 35a】** に述べられている。

61) ba‘deni. Or. 5338, fol. 64a による補遺。

62) D126; Or. 5338, fol. 64a; Or. 9660, fol. 67a; Or. 9662, fol. 79a は DVŠMN と誤って綴る。

63) -kā / -lārgā. Or. 5338, fol. 64a; Or. 9660, fol. 67a; Or. 9662, fol. 79b による補遺。

64) ruḥṣat. D126 は RVḤṢT と綴るが、Or. 5338, fol. 64b; Or. 9660, fol. 67b; Or. 9662, fol. 79b の RḤṢT による。

保護のもとに>と言って、ヨフルガ (Yofürgā)⁶⁵⁾ の道によりヤルカンドへ向かった。時はサラターン [イラン暦4月 (西暦6月~7月)] であった。大気の放熱⁶⁶⁾ は地獄 [の有様] を伝えている [かのような]。ホージャムの病状はとても微妙⁶⁷⁾ であった。一日進んで、ボグラ・クム (Boğrā Qūm)⁶⁸⁾ に至った時、医者たちは窮してしまい、道中に逗留した。翌朝、ホージャムは朝の礼拝から戻り⁶⁹⁾、「逗留の理由は何である。進むように」と命じた。医者たちが脈⁷⁰⁾を見ると、健康の兆候が少し出ている。ホージャムは次のように言った。「讃えられるべき至高なる神が少し治癒してくださった。私は次のように希望する。すなわち、私をこのような場所で窮地にさらさない。父祖たちの足に [つまり、墓に] 我が眼を眉墨のようにこすりつけ、年長の⁷¹⁾ 我が帝王へのお目通りがかなった後、この死去の旅を期待する」と言って出立した。

ヤルカンドの人びとが絶え間なく迎えに出ている。ユースフ・ホージャムを輿に乗せ城市に連れて入ろうと望んだ。しかし、ユースフ・ホージャムは同意しないで、帝王にふさわしい衣服を着て腰帯を絞め、風のように速い馬に乗り、疾駆して (javalān-bāzliq birlā) 城市に [p. 122 / fol. 61b] 入った。それから、オルダの中庭に至った。すべての騎兵随員 (ḥayl ḥaṣam) が出てきて、敬意を表した。オルダの中庭でホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下と出会い、抱き合って号泣した。よそ者たちに入るのを許さず、すべての家族 (ahl ‘ayāllar) と会い、館 (sarāy) に入って栄誉の王座 (taḥt-i ‘izzat) において確乎となった。ウラマーたちや国の人びとが入ってきて、クルアーンの序章を朗読した。ユースフ・ホージャム猊下を寢床に横たえた。

65) D126 では YAFVRĠV, Or. 9660, fol. 67b では YAFVRĠY と綴るが, Or. 5338, fol. 64b の YFVRĠA による。カシュガル・オアシス東南部を流れるヨブルガ川, あるいはヨブルガの町を指している (『中華人民共和国新疆维吾尔自治区地図集』ウイグル語版, 1966年, 138-139頁の地図を参照)。『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編には「ヨフルガ大渠」という地名が出てきて, YFVRĠY と綴られている (ジャリロフ・アマンベク, 河原弥生, 澤田稔, 新免康, 堀直 『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』NIHU プログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点, 2008年, 日本語訳, 189, 191頁, アラビア文字本文, 412b, 413b)。

66) tābiš. D126 は TBŠ と綴るが, Or. 5338, fol. 64b; Or. 9660, fol. 67b; Or. 9662, fol. 79b の TABŠ による。

67) D126; Or. 5338, fol. 64b; Or. 9660, fol. 67b は NAZVK と綴るが, nāzūk と読む。

68) 「雄ラクダの砂」を意味するボグラ・クムは, オルダム・バーディシャー聖域のある砂漠を指していると思われる (澤田稔「オルダム・バーディシャー聖域について」『内陸アジア史研究』第14号, 1999年, 95-96頁, Sawada Minoru, “A study of the current Ordām-Padishah system,” *Journal of the History of Sufism*, vol. 3, 2001, pp. 94-95 参照)。

69) bāmdāddīn yanīp. D126 は BAMDAD DYANB と綴るが, Or. 9660, fol. 67b; Or. 9662, fol. 79b の BAMDADDYN YANYB による。

70) nabd. D126 は TBĎL, Or. 5338, fol. 64b は TFŠYL, Or. 9660, fol. 67b は TFDYL と綴るが, Aグループの写本の Turk d. 20, fol. 95a; D191, fol. 108a; ms. 3357, fol. 142b の NBD による。

71) aka. D126; Or. 5338, fol. 64b; Or. 9662, fol. 80a は AKAH と綴るが, Or. 9660, fol. 67b の AKA による。

医学のやり方で治療した。すべての皇子たちが常に傍らにひかえていた。

皇女たち (da‘īfa pādīšāhzādalar) は泣き悲しみ、〔快癒を〕願った。特に、ウルグ・アズィーズィム (Uluġ ‘Azīzim) という名の乳姉妹がいた。とても美しく清らかな性質でマルヤム (マリア) の属性をもち、真義を知る人であった。その毛髪は緑豆、米〔の色〕⁷²⁾〔になっていた〕⁷³⁾〔が〕、まだ純潔であった。頻繁にスイッディーク・ホージャム・パーディシャーは詩句をこの方から習得していた。ユースフ・ホージャムには二人の娘 (‘ājiza) がいた。その一人の気高い名はズフラ・ベギム (Zuhra Begim), もう一人はズバイダ・ベギム (Zubayda Begim) と名付けられていた。ズバイダ・ベギムをホージャ・ジャハーン・ホージャム猥下の年少の息子 (kičik oġlan) ムハンマド・ホージャム (Muḥammad Hōjam) に嫁がせていた。ムハンマド・ホージャムは結婚して六ヶ月後、イラに上がって行っていた。まさに上がって行ってから (šol čiqqaniča) イラから下りて来なかった。この三人の親愛なる者⁷⁴⁾が常時ユースフ・[p. 123 / fol. 62a] ホージャムの傍らにひかえていた。

しかし、この方の病状は快方に向かわなかった。むしろ、来世の方への願望が日に日に増していった。〔ユースフ・ホージャムは〕時々、先達の偉人たち (muqaddam buzurġlar) が来て招いているかのごときことを伝えていた。いつも諸靈魂⁷⁵⁾と語り合っって満ち足りていた。カシュガルにおいて健康であった時のことか、幾晩か一人の罪深き家僕 (gunah ḥādim) を同行させ

72) rang. A グループの写本の Turk d. 20, fol. 95b; ms. 3357, fol. 143b による補足。

73) bolġan. Or. 9660, fol. 68b; Or. 9662, fol. 80b による補足。

74) D126; Or. 5338, fol. 65b では üç ‘azīz, Or. 9660, fol. 68b; Or. 9662, fol. 81a では üç ‘azīzim。乳姉妹のウルグ・アズィーズィムと二人の娘を指している。

75) arwāḥlar. D126 は ARVAHLAR と綴るが、Or. 5338, fol. 65b; Or. 9660, fol. 68b; Or. 9662, fol. 81a の ARVAHLAR による。

て馬に乗り、フサイン・ファイズ・アッラー・ホージャム (Ḥusayn Fayḍ⁷⁶⁾ Allāh Ḥōjam) の〔墓の〕前の空き地⁷⁷⁾において夜明けになるまで諸靈魂⁷⁸⁾と法話をしあつて (ṣuḥbat quruṣup) 満ち足りていた。それ故に、ユースフ・ホージャムの心はいつも来世の方に向いていた。世のりびとから顔をそむけて⁷⁹⁾いた。ヤルカンドに来て三ヶ月になるまで、このように時を過ごした。

物語の章。イラの地について聞かなければならない。

ダバチ (Dabācī) が王 (tōrā) になり坐した時、アムルサナー (‘Amūrṣanā) はシナ皇帝 (Ḥāqān-i Čīm) のもとに行き、シナ皇帝から大軍を求め率いて、ヤルカンド、カシュガルを取つて与えるという約束をしてイラに向かった。以前からシナ (Čīm) のカーフィルたちはカルマ

76) D126; Or. 5338, fol. 65b の FYḌ による。Or. 9660, fol. 69a; Or. 9662, fol. 81a は FYḌL と綴るので、Faḍl Allāh となる。この人物は、ジャマール・アルカルシーの *Mulḥaqāt bi-al-ṣulāḥ* で言及されている Ḥusayn al-Faḍlī であるかもしれない。その記事によると、彼は 486 (西暦 1093/94) 年にカシュガルで亡くなり、そこに埋葬された (*Istoriia Kazakhstana v persidskikh istochnikakh, tom 1, Džamal al-Karshi, Mulḥakat bi-s-surakh, Vvedenie, perevod s arabsko-persidskogo, kommentarii, tekst, faksimile* Sh. Kh. Vokhidova, B. B. Aminova, Almaty: Daik-Press, 2005, p. 91; *Materialy po istorii Srednei i Tsentral’noi Azii X-XIX vv.*, Tashkent: Izdatel’stvo Fan Uzbekskoi SSR, 1988, p. 102; Julian Baldick, *Imaginary Muslims: The Uwaysi Sufis of Central Asia*, London-New York: New York University Press, 1993, pp. 155-157)。『ターリーヒ・ラシーディー』には、カシュガルにある数多くの〔聖者の〕墓の一つとして Husain Faṣl Khwāja のものが挙げられている (*A History of the Moghuls of Central Asia, Being the Tarikh-i Rashidi of Mirza Muhammad Haidar, Dughlat, An English Version* Edited, with Commentary, Notes, and Map by N. Elias, the Translation by E. Denison Ross. London: Curzon Press, 1895, reprint 1972, p. 300)。また、ムッラー・ムーサー・サイラーミーの『ターリーヒ・アムニーヤ』には、カシュガルのマザールの一つとして Ḥasan Fayḍ Allāh Ḥvājām の名が挙げられている (*Tārīḥ-i amniyya*, Bibliothèque Nationale, Collection Pelliot, B1740, fol. 196a)。これら三者はフサイン・ファイズ・アッラー・ホージャムとは微妙に名前の一部に違いがあるけれども、比較対照のために注記しておく。

77) šibr (<ŠBR)。šibr には「親指と小指とを張った長さ」のほかに ‘a span of space’ (James W. Redhouse, *A Turkish and English Lexicon*, New Impression, Constantinople, 1921, p. 1115) の意味があるので、「空き地」と意訳する。なお、本書 [p. 74 / fol. 37b] 「日本語訳注 (3)」53 頁、[p. 107 / fol. 54a] 「日本語訳注 (4)」105 頁に出てきた ŠBR の読みと意味を不明としたが、šibr と読み、訳文を「空き地」と修正する。

78) arwāḥlar。D126 は ARVAHLAR と綴るが、Or. 5338, fol. 65b; Or. 9660, fol. 69a の ARVAHLAR による。

79) örügān。D126 は AVRKAN と綴るが、Or. 5338, fol. 65b の AVRKAN による。

クたちと争っていた。しかし、都合のよい機会はなかった⁸⁰⁾。アムルサナーが限りのない⁸¹⁾軍とともに来たという知らせがダバチの耳に入り、その全身に震えが生じた。何故ならば、その国の内部はかなり分裂状態にあったからである。[p. 124 / fol. 62b] シナの軍と対抗する力はある得なかった。[ダバチは]仕方なく、逃亡の道を選び、近臣の者たちから三百人の好戦的な騎手を同行させて逃げ、どの方向に行くにも救いの策を見いだせないで、ウシュを通ることになった。「我々にこの地方のなかで道はあるのか。何とか⁸²⁾我々にとって逃げ場⁸³⁾となるような」と、ウシュのハーキム、ホージャ・スィー・ベグに人を遣った。

しかし、ホージャ・スィー・ベグは好機とみなし、「[程よい言葉で [ダバチを] 連れてくるように]と密偵を遣わした。アムルサナーから来た使者に好意を示し、程よい許可を出して戻らせた。それから、ウチュの人びとに持ち場を与え、多くの勇者をまさしく完璧に武装させ、彼自身は王 [ダバチ] のもとへ⁸⁴⁾ 迎えに出て、かなりの策略により、この単純なカルマクを、助言を覆して (pand örüp) 城市⁸⁵⁾ に連れて入って城門を固め、全ての人びとと [協力して]、幾人かを家屋で、幾人かを通りで捕まえ拘束して⁸⁶⁾、ダバチをはじめ全カルマクをイラに連れて行った。

さて、イラからダバチが逃げ出て、統治の王座は空となり、アムルサナーがやって来て王座に上って坐した。ホージャ・スィーはダバチを連れて行き、アムルサナーへ贈り物とした。ア

80) Lekin maħal yārī bermäs erdi. yārī bermäs の部分を D126 は YARMAS と綴るが、Or. 5338, fol. 65b; Or. 9660, fol. 69a の YARY BRMAS による。なお、Aグループの写本の Turk d. 20, fol. 96b-97a; D191, fol. 109b; ms. 3357, fol. 145b は「しかし、互いに復讐する都合のよい機会はなかった」と記す。

81) bī-karān. D126 は BYKRANH と綴るが、Or. 5338, fol. 66a; Or. 9660, fol. 69a; Or. 9662, fol. 81b の BYKRAN による。

82) D126 は har naw' の前に BR と綴られているが、不要である。

83) panāh. D126; Or. 9662, fol. 81b は PNA と綴るが、Or. 9660, fol. 69b の PNAH による。

84) jāsūs ibārđi ki yaħšī sözlär birlä keltürgäy sen. ‘Amürsanādin kelgän älčigä iltifātlar qılıp yaħšī izn birlä yandurdı. Ba‘dahu Üč ħalqıga jā berip, bir munča dilāvarlarnı rāst mukammal vā musallaħ (<MSLĤ [sic] qılıp özi pīs-bāz törāniñ aldıga. Or. 9660, fol. 69b; cf. Or. 9662, fol. 82a による補遺。ただし、「アムルサナーから来た使者」は Or. 9662, fol. 82a では「ダバチから来た使者」となっている。

85) šahr. D126 は ŠKR と誤記するが、Or. 5338, fol. 66a; Or. 9660, fol. 69b; Or. 9662, fol. 82a の ŠHR による。

86) 清朝史料は、ダワチ (達瓦齊, ダバチ) とその子、羅卜扎ら 70 人余りがホージャ・スィー・ベグ (霍集斯伯克) の伏兵に捕縛されたことを伝えているが、その場所は必ずしも明確ではない。『欽定外藩蒙古回部王公表伝』巻 94 によれば、ダワチらは庫魯克嶺を越えたのちに、あるいは『皇朝藩部要略』巻 15 によれば、ウシュ (ウチュ, 烏什) 城外で捕らえられたようであるが、椿園七十一『西域聞見録』巻 5, 準噶爾叛亡紀略によると、捕縛され城 [ウシュ城市] に入れられた (包文漢, 奇・朝克因 (整理) 『蒙古回部王公表伝』第 1 輯, 呼和浩特: 内蒙古大学出版社, 1998 年, 630 頁, 祁韻士『皇朝藩部要略』1965 年, 台北: 文海出版社, 831-832 頁)。

ムルサナーは喜んで、ダバチをその兵とともにシナ皇帝に送った⁸⁷⁾。今日にいたるまで北京⁸⁸⁾のなかにこのカルマクたちの子孫がいる。皇帝は敬意を表してダバチを保護し、その息子に〔宗室の〕娘を与えた⁸⁹⁾。

さて、イラにおいてアムルサナーが王となり、いくらか決着が付き、ヤルカンド、カシュガル、ホタン、この三つの城市を服属させようという動機が生じた。皆で相談した。ヤルカンドに軍が行くことは【p. 125 / fol. 63a】可能であった。しかし、カルマクたちは四散しており、シナの軍は遠くから来て困窮している (kelgän dar-mānda⁹⁰⁾)。今、軍が行くことは非常に難しい。ユー・スフ・ホージャム・パーディシャー⁹¹⁾ はとても慎重で賢明な人であり、ムスリムたちはみな力に満ちている⁹²⁾、と言っていた。軍が行って勝利することは非常に難しいと差し控えていた時、アクスのハーキム、アブド・ワッハブ・ベグ、ウチュのハーキム、ホージャ・スィー・ベグは次のように得策を示した。すなわち、「ひとつの策がある。それによりこれらの城市を取ることは容易である。イラのなかにホージャ・アフマド・ホージャム (Hōja Aḥmad Hōjam)⁹³⁾ の二人の息子がいて、皆の指導者 (pīšvā) である。何故ならば、カシュガルの人びとのホージャはこの方たちであるから。もし、シナの軍に一人の軍司令官が、カルマクたちにこのホージャたちの一人が加わって行くならば、イラのなかでこのホージャたちが王 (tōrā) になったと噂

87) 『平定準噶爾方略』正編、卷15、乾隆20年7月乙酉の条によると、ダワチがホージャ・スィー・ベグに捕らえられて清の軍営に送致されたのは、乾隆20年6月24日(西暦1755年8月1日)のことである(詳しくは、佐口透『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』東京:吉川弘文館、1963年、59頁参照)。但し、アムルサナーがダワチの移送にどのように関わったのかは不明である。この時期のアムルサナーの行動については、森川哲雄『「四オイラト史記」に見られるアムルサナーの事蹟』森三樹三郎博士頌寿記念事業会編『森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集』京都:朋友書店、1979年、878-879頁、森川哲雄「アムルサナをめぐる露清交渉始末」『九州大学歴史・地理学年報』第7号、1983年、79-80頁参照。

88) Bejīn. D126はBRJYNと綴るが、Or. 9660, fol. 70a; Or. 9662, fol. 82aのBJYNによる。

89) 『欽定外藩蒙古回部王公表伝』卷12、卷94によると、乾隆20(1755)年10月ダワチは乾隆帝に受け入れられ、その後、「和碩親王」に封じられて京師(都)に居住することになった。さらに翌年には郡主をめとり「多羅額駙」の称号を授けられた。乾隆24(1759)年にダワチが没すると、長子の羅卜扎が継いで「多羅郡王」に封じられ、乾隆27(1762)年には郡君をめとり「固山額駙」の称号を授けられた。また、乾隆39(1774)年にダワチの次子、富塔喜が「多羅貝勒」に封じられた(包文漢、奇・朝克因(整理)『蒙古回部王公表伝』第1輯、119、630-631頁)。『欽定西域同文志』卷8によると、ダワチは「和碩親王額駙」、子の羅布扎(Lobja)は「多羅郡王額駙」に封じられた(『欽定西域同文志』上冊、東京:東洋文庫、1961年、508、518頁)。

90) D126; Or. 5338, fol. 66bはMANDHと綴るが、Or. 9660, fol. 70aのDRMANDHによる。

91) D126はPADŠAと綴るが、Or. 5338, fol. 66b; Or. 9662, fol. 82bのPADŠAHによる。

92) pur-quwwat. D126はFVR QWTと綴るが、Or. 9660, fol. 70aのPR QWTによる。

93) ホージャ・アフマドは、ホージャ・アフアークの長男ホージャ・ヤフヤーの息子である(本書【p. 37 / fol. 19a】【p. 39 / fol. 20a】「日本語訳注(2)」100、102頁)。カルマクによるホージャ・アフマドの捕囚については、本書【p. 44 / fol. 22b】「日本語訳注(2)」107-108頁で述べられている。

が広まれば、カシュガルの人びとは皆、戦わずに奮闘せずに、この方たちに服従する。諸城市を取った後に、このホージャたちの去就 (turar turmasliġ) をハーン、王が関知する (bilürlär)」と助言した。

この得策は全てのカーフィルにとって道理にかなったものとなり、直ちにホージャ・アフマド・ホージャムの二人の息子〔を連れて来た〕⁹⁴⁾。すなわち、ホージャ・ブルハーン・アッディーン (Ḥōja Burhān al-Dīn)、もう一人はハーン・ホージャム (Ḥān Ḥōjam) と呼ばれていた。この方たちは長年の間、カルマクたちの手中において捕虜であった。カルマクたちはこの方たちにエレン・カブルガ (Erān Qabūrgā)⁹⁵⁾ において場所を与えていた。至高なる神はこの方たちを釈放しようと決意した。【p. 126 / fol. 63b】それから、カルマクたちはこの方たちを、敬意を表して連れて来させて約束し、中国軍の一部隊 (bir tāyfa Ḥīṭay laškari)、カルマク軍の一部隊、タグリク⁹⁶⁾ の一集団 (bir gurūh Tagliq) 〔という〕三集団の軍指揮官にして、ホージャ・ブルハーン・アッディーンをアクスに向かわせた。ハーン・ホージャムをイラに留め置いた。

さて、ホージャ・ブルハーン・アッディーンはアクスに来て下馬した。そこからまた軍を率いてウチュに來た。ウチュの人びとは丁重に城市に連れて入った。この方たちはカシュガルに行くことを相談した。ウチュの人びとは、カシュガルに軍が行くことは決して道理にかなっているとみなさなかつた。むしろ、ユースフ・ホージャムとまさにこれらの城市において生命の保証をしあう (amān turmaq) のが有利であるとみなした。カシュガルの人びとは完璧に敏捷な⁹⁷⁾ 群衆 (jam‘īyat) であると言われていた。全方面にいるクルグズたちが集合したらしい。ヤルカンド、ホタンからも軍が集合したらしい。〔ウチュの人びとは〕「もしこの者たちが我々に対し軍を率いるならば、これらの城市の土を天に撒き散らすだろう」と言って、まさに心配している。

物語の章。

ヤルカンドにおいてユースフ・ホージャム猊下の病状がますます悪化の方に向かった。だんだん世間の状況は各方面より様々な騒動を生じさせた⁹⁸⁾。そして、扇動的で不吉な知らせが聞かれた。幾人かの者は、「イラの中は混乱している。シナ皇帝から軍が来て、アムルサナーを

94) Or. 9662, fol. 83a による補遺。

95) エレン・カブルガは、イリ河の支流ハシュ (カシュ) 河の水源付近の山地、エレーン・ハビルガの訛りであろう。本書【p. 44 / fol. 22b】「日本語訳注 (2)」108 頁の注 115 参照。

96) 原義は「山地民」。

97) sīz. D126; Or. 9662, fol. 83b は SZ と綴るが、Or. 5338, fol. 67a; Or. 9660, fol. 71a の SYZ による。

98) paydā qıldı. D126; Or. 5338, fol. 67b は paydā / faydā boldī と記すが、Or. 9660, fol. 71a; Or. 9662, fol. 83b による。

王座に上らせ、ダバチを捕えてシナの城市に連れ去った **[p. 127 / fol. 64a]** ようだ。カシュガル、ヤルカンドのことを考え、軍を派遣してアクスに來たようだ」と言った。そのため、策を講じる力のある者たち (ahl-i tadbīr) が集まり相談して、ホージャ・ジャハーン・ホージャムに次のように申し上げた。「おお、世界の帝王よ、そのように不吉な知らせが明らかになった。事が起きる⁹⁹⁾ 前に処置 [が必要で]、後悔は役に立たない。ユースフ・ホージャム猥下の病状はとても微妙¹⁰⁰⁾ であり、かの人びとの軍がこの地に来れば、我々を管理する (ba-dābiṭa¹⁰¹⁾ qīlur)。国の保持において弱気はよくない。適切なのは次のことである。すなわち、アクスに、ウシュに軍が行けば、[その軍が] 彼ら [=アクスとウシュの住民] を保護してカーフィルの占拠から引き離すならば、カーフィルに勝てば、そして望ましいことだが、カーフィルたちを追いイラに至らせて[ヤルカンドに]戻ってくる。そうでなく、カーフィルたちの軍が勝つならば、戻ってくる。もし背後から追ってきてここに来るならば、我々は可能な限り戦ってみよう」と得策を示した。ホージャ・ジャハーン猥下はこの相談に黙っていた。返答しなかった。三日が経った。四日目に、得策とみなす者 (maṣlahat-bīn) たちは、軍が行くことについて度を超えて指図した。若い王子 (šahzāda) たちはとても勇敢で意欲的であった。この集りの合意により [ホージャ・ジャハーン・] ホージャムもまた「行くなら行くように」と許可を与えた。

しかし、ユースフ・ホージャムは軍が行くことを決して理にかなっているとみなさなかった。むしろ、度を超えて拒絶し、決して許可¹⁰²⁾ しなかった。**[p. 128 / fol. 64b]** 次のように言った。「限りなく [敵は] これらの城市に軍を率いてくるだろう。自らこの地に足を踏み入れることができよう。突然¹⁰³⁾ [我々の] 軍が敗北するならば、続々と追ってくる。まるで行って呼んできたかのようになる。何故ならば、我々の軍に、信頼するに当たらない不誠実な民であるクルグズが混じっているからである。また、私の病状は重く、回復の見込みはない。今、軍を率いる時機ではない。忍耐我慢の時である」と言って、そのすべてを (in hama) 拒絶した。ホージャ・ジャハーン・ホージャム猥下は同意した。しかし、人々を自分の権限下に置かず、仕方なく軍に指示した (laškargā jā berdilār)。ユースフ・ホージャムには聞かせなかった。神 [のみ] がその数を知るほどの兵が集まった。クルグズからも多くの兵が集まった。この軍をホージャ・ヤフ

99) wuqū'. D126 は VQV と綴るが、Or. 5338, fol. 67b; Or. 9660, fol. 71b; Or. 9662, fol. 84a の VQV' による。

100) nāzūk. D126; Or. 5338, fol. 67b; Or. 9660, fol. 71b; Or. 9662, fol. 84a は NAZVK と綴る。

101) D126; Or. 9660, fol. 71b は BY ZABT' と綴るが、Or. 5338, fol. 67b; Or. 9662, fol. 84a の BḌABṬA による。

102) ruḥṣat. D126 は RVḤṢH と綴るが、Or. 5338, fol. 68a; Or. 9660, fol. 72a の RḤṢT による。

103) ba-nāgāh. D126 は BNAKA と綴るが、Or. 5338, fol. 68a; Or. 9660, fol. 72a の BNAKAH / BNAKH による。

ヤー・ホージャム (Hōja Yahyā Hōjam)¹⁰⁴ が率いて行くことになった。七日間で軍を整え、カシュガルに向かわせた。ヤルカンドからホージャ・ヤフヤー・ホージャムとともにシャン・ベギ¹⁰⁵ のフダー・ベルディ・ベグ (šaṅ begi Ḥudā Berdī Beg), カルガリク (Qārgāliq)¹⁰⁶ のハーキム, ミール・アワズ・ベグ (Mīr ‘Awaḏ Beg), [その息子ミール・ニヤーズ・ベグ (Mīr Niyāz Beg)]¹⁰⁷, トフタ・ベグ (Tōḥta Beg) がホージャムに同行して進んだ。クルグズたちのクバード¹⁰⁸・ビヤ¹⁰⁹はこの者たちの軍を率いてイエンギ・ヒサル (Yeñi Hiṣār)¹¹⁰ に至った。イエンギ・ヒサルのベグはこの軍が来ることの情報¹¹¹ を得て、自ら恐れて常時カルマクに好意の目を向けていたが、この軍を見て、さらにその敵意を増した。[ホージャ・ヤフヤー・] ホージャム猥下はこの者の様子を知り **[p. 129 / fol. 65a]** 背信を疑った。即座にこの者を拘束し、一日留まってイエンギ・ヒサルの事を片付け、軍を率いてカシュガルにお越しになった。軍に「城市を欲しないでアルトゥチュ (Artūč)¹¹² の道によりウシュに進むように」と命じた。

物語の章。聞かねばならない。

ヤルカンドからこの軍が進んで二日後にユースフ・ホージャム・パーディシャーが儂き世から永遠なる世へ旅立った。[<「我々は神のもの。我々は神のみもとに帰る」と言われている>〔『クルアーン』 2-156〕¹¹³〕。その後、ホージャ・ジャハーン・ホージャムはこの軍が行くことを理に

104) ホージャ・ジャハーンの末弟ホージャ・アブド・アッラーの二男(本書 [p. 65 / fol. 33a]「日本語訳注(3)」44頁参照)。

105) ジューンガル王国のために糧賦の徴収を司る職の名称であろう。その職掌と語源については、佐口透『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』東京:吉川弘文館, 1963年, 111-112頁, Joseph Fletcher, “The biography of Khwush Kipāk Beg (d. 1781) in the Wai-fan Meng-ku Hui-pu wang kung piao chuan,” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 36, Budapest, 1982, p. 171, note 14 (Joseph F. Fletcher, *Studies on Chinese and Islamic Inner Asia*, Great Britain: Variorum, 1995に再録)を参照されたい。

106) ヤルカンドの南南東約 60km に位置する。現在の葉城 (Qaghiliq)。Sven Hedin, *Central Asia Atlas*, NJ43 の地図参照。

107) Or. 9660, fol. 72b による補遺。ただし、人名の一部 Mīr を MR と綴っている。

108) D126 は QBAT と綴るが, Or. 5338, fol. 68b; Or. 9660, fol. 72b; Or. 9662, fol. 84a の QBAD による。

109) 本書 [p. 116 / fol. 58b] では「クバード・ミールザー」と記されている。Or. 9660, fol. 72b ではビヤではなく、ミールザーと記す。

110) ヤルカンドの西北約 110km に位置する。Sven Hedin, *Central Asia Atlas*, NJ43 の地図では Yangi Hissar と表記されている。

111) wuqūf. D126 は VQF と綴るが, Or. 9660, fol. 72b; Or. 9662, fol. 85a の VQVF による。

112) アルトゥチュはアルトゥシュのことで、カシュガル市の西北約 20km の「上アルトゥシュ」とカシュガル市の東北 30km の「下アルトゥシュ」とがある。本書 [p. 79 / fol. 40a]「日本語訳注(4)」82頁の注6参照。

113) Or. 5338, fol. 68b; Or. 9662, fol. 85a による補遺。

かなっているとみなさなかつた。ガーズイーをはじめ全てのベグたちは軍が戻ることを良いとみなさなかつた。次のように申し上げた。「道に出た後は、行くほうがより良い。我々の間にある混乱があちら側に知られない前に、軍が行って向かい合うならば、敵は失望し、気力勇気が少なくなる」と。この得策とみなす者たちの言葉により、[ホージャ・ジャハーン・] ホージャムは拒むことができず、仕方なく同意した。即座にお悔やみ状を書き、スーフイー・ホージャム (Šūfi Hōjam) ¹¹⁴⁾ に渡した。そしてまた、統治の書状 (saltanat nāma) を書き、ナスル・アッラー・ホージャム (Naṣr Allāh Hōjam) に渡した。次のように遺言した。すなわち、「そなたたちはカシュガルに行き、ある日、お悔やみ状を渡して読ませ、哀悼せよ。さらにある日、勅命の書状 (manšūr nāma) を読ませ、子 (farzand) ¹¹⁵⁾ のホージャ・アブド・アッラーを [カシュガルにおける] 統治の座 ¹¹⁶⁾ に確立するように」と言って退出の許可 ¹¹⁷⁾ を与えた。

[p. 130 / fol. 65b] この者たちは旅装を整え、カシュガルにお越しになった。それからカシュガル都市に入り、ホージャ・アブド・アッラー猊下とホージャ・ヤフヤーに面会してオルダに下馬した。カシュガルの全ての首領たち (sardārān) を集め、スーフイー・ホージャムが先導して、ウラマーたちが『クルアーン』全章の朗詠、祈願、タクビール [アッラーフ・アクバルを唱えること] をした後に、お悔やみ状を出して読んだ。その内容は次のとおり。

「<だれでもみな死を味わう> [『クルアーン』 21-35] という摂理 (ḥukm) によりアダムの子は誰も、さらに、命あるものは全て、この死の輪環を拒むことはできない。どんな使徒たちや聖者たち、ウラマーたちや学者たちがこの罨から救われているのか。[それのみならず、王、乞食、信心深き者、カーフィルはこのことに関し同一であり、違いはない] ¹¹⁸⁾。今、ある者に [死期が] くれば、明日、別の者にくる。

詩

たとえ、ある者が長寿になるとしても、ある日
百万の悲哀 ¹¹⁹⁾ により失望して、ついに去らねばならない

114) A グループの写本の Turk d. 20, fol. 100a; D191, fol. 113a; ms. 3357, fol. 151b は、「王子たちのうち、自身の婿スーフイー・ホージャムに (šahzādalarđin öz dāmādları Šūfi Hōjamğa)」と記しているため、スーフイー・ホージャムはホージャ・ジャハーンの娘婿であることが分かる。

115) ホージャ・アブド・アッラーはユースフ・ホージャムの息子であり、ホージャ・ジャハーンにとって甥に当たるが、後述の個所でも「子」と呼ばれている。

116) taḥt. D126 は THT と綴るが、Or. 5338, fol. 69a; Or. 9660, fol. 73a; Or. 9662, fol. 85b の THT による。

117) ruḥṣat. D126 は RVḤṢH と綴るが、Or. 9660, fol. 73a; Or. 9662, fol. 85b の RḤṢT による。

118) Or. 9660, fol. 73b; Or. 9662, fol. 85b-86a による補遺。

119) ḥasrat. D126 は ḤSRT と綴るが、Or. 5338, fol. 69a; Or. 9660, fol. 73b; Or. 9662, fol. 85a の ḤSRT による。

おお、子のホージャ・アブド・アッラーよ、天命に服従する義務がある。〔忍耐我慢よりほかにどんな形も知られていない〕¹²⁰⁾。どれほど襟を引き裂いて顔を引っ掻いても、その益はないのである。奴僕たることに服従屈伏しない徴候がある。おお、子よ、要するに、賢明な者には言葉で充分である。〈賢明なる者には合図で充分である〉。今、そなたの兄弟〔ホージャ・〕¹²¹⁾ムーミンに、そなたの母バヤーン・アガチャ (Bayān Agāča) に、そして一団の家僕¹²²⁾ 属人たちに、助言忠告〔をして、心を慰める〕¹²³⁾ ようにせねばならない。〔時はとても差し迫っている。残っている者たちが無事であることは授かりものである〕¹²⁴⁾。至高なる神への私の願いは、生命が身体にあることである。私はそなたたちの教導を怠らない。書状を終える。平安あれかし。

この書状を読むやいなや、皆は泣き悲しんで気を失い、また正気にもどって泣きやみ、大集団が〔書状の内容を〕承知した (jam'ī 'azīm i'tirāf taptılar)¹²⁵⁾。【p. 131 / fol. 66a】翌朝、ナスル・アッラー・ホージャムは頭上から勅命の書状を取り読んだ。その内容は次のとおり。

「〈慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において〉。〈わしは地上に代理者を置こうと思う〉〔『クルアーン』2-30〕。すなわち、百千の称賛が世の神に。公正なスルターンと優れたアミールは公正寛大により臣民たち¹²⁶⁾ や窮民たちをこの世において信頼できる安寧で保ち、力強い者たちから無力な者たちに暴虐圧制をこうむらせず、治安の面で心配させない。イスラームの帝王に服従した信心深き者たちを来世においてその帝王の旗の下に集め、天国の方へ連れて行く。イスラームに屈伏しなかった者は、この世において敵、来世において反乱者として辱められ、百千の罰に処せられるはずである¹²⁷⁾。おお、カシュガルの民よ、我々が長年の間カーフィルたちに服従して過ごしてきたことを自覚せよ。〈神に称賛あれ〉、我々はイスラームの旗を我々の頭上に掲げ、宗教を新たにした。我が兄弟ユースフ・ホージャは〔神の〕下僕たることを履行し、生命を創造主に委ねた。今、我々はその最愛の子ホージャ・アブド・アッラーが統治の王座に相応しいとみなし、パーディシャー・ホージャ (Pādišāh Ḥōja) と名付けた。誰でもこのパーディシャー・ホージャへの服従から顔を背けるならば、その世俗の物 (dunyāsī) は強

120) Or. 9660, fol. 73b; Or. 9662, fol. 86a による補遺。

121) Or. 9660, fol. 73b; Or. 9662, fol. 86a による補遺。

122) ḥādīm. D126 は ḤAM と綴るが、Or. 5338, fol. 69b; Or. 9660, fol. 73b; Or. 9662, fol. 85a の ḤADYIM (sic) による。

123) Or. 9662, fol. 86a; cf. Or. 9660, fol. 73b による補遺。

124) Or. 9660, fol. 73b; Or. 9662, fol. 86a による補遺。

125) Or. 9660, fol. 73b は「大集団が分離した」(jam'-i 'azīm iftirāq taptılar), Or. 9662, fol. 86a は「大集団が別離を嘆きあった」(jam'-i 'azīm āh-i firāq tartištılar) と記す。

126) ra'āyā. 但し、D126; Or. 5338, fol. 69b; Or. 9660, fol. 74a; Or. 9662, fol. 86b は R'AYH と綴る。

127) giriftār bolgusī dur (Or. 5338, fol. 70a)。D126 は giriftār aylādi と記す。

奪略奪に¹²⁸⁾、家族は捕囚に、自身は殺害に値するとみなすだろう。来世において神と預言者の前で恥じ入り¹²⁹⁾、地獄に捕らわれるだろう。そしてまた、子のホージャ・アブド・アッラーよ、**[p. 132 / fol. 66b]** そなたもムスリムたちの司法と審判 (dād sorāḡ) を聖法 (シャリーア) の定めで治め、聖法の従者となるように。そしてまた我々は、そなたが¹³⁰⁾ 軍の司令官になるようにと言っていた。今、そなたの兄弟ホージャ・ムーミンはカシュガル軍を率い、ホージャ・ヤフヤーとともに迅速に目標に向かい始めるように。書状を終える。平安あれかし。

そこにいた人々は書状の内容を知り、ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム猊下を絨毯 (zilča) に坐らせ、〔絨毯の〕一端をホージャ・ヤフヤーが、一端をナスル・アッラー・ホージャム¹³¹⁾ が、一端を〔カシュガルの〕ハーキム、フシュ・キフェク・ベグ (Ḥwūš Kifāk Beg) が、一端を〔カシュガルの〕当代のアーラム (a‘lam, 最上位の学者)¹³²⁾、アーホン・ムッラー・マフムード (Āḥvun Mullā Maḥmūd) が持つて、祝賀しながら統治の王座に据え、彼ら自身〔=そこにいた人々〕は玄関口¹³³⁾ に入り祝賀した¹³⁴⁾。アブド・アッラー・ホージャム猊下は王座において確乎となり、各人に配下の兵を整えて出立させるよう命じた。この命令により全ての軍の旅の糧食を用意して出立した。ホージャ・ムーミン猊下は兄弟〔=ホージャ・アブド・アッラー〕の許可¹³⁵⁾ を得て行軍 (safar) の用意をして出立した。カシュガルのベグたちのうち、ベシュケリム (Beš-kerim) のハーキム、ムハッラム・ベグ (Muḥarrām Beg), ファイザーバード (Fayḍ-ābād) のハーキム、ニヤーズ・ベグ (Niyāz Beg)¹³⁶⁾ たちを (bularnī) 同行させ、ベシュケリム村 (mawḍi‘) でホージャ・ヤフヤーと合流した。

128) tārajā (Or. 9660, fol. 74a; Or. 9662, fol. 87a)。D126 は tājīga と記す。

129) šarmsār。但し、D126; Or. 9660, fol. 74a; Or. 9662, fol. 87a は ŠRM SAZ と綴る。

130) siz。但し、D126; Or. 5338, fol. 70a; Or. 9660, fol. 74b; Or. 9662, fol. 87a は sizni と記す。

131) D126 は「アッラー」の部分で V ALLH と綴るが、Or. 9660, fol. 74b; Or. 9662, fol. 87a により Allāh と読む。

132) アーホン・ムッラー・マフムードがカシュガルのアーラム (a‘lam, 最上位の学者) であることは、本書 [p. 106 / fol. 53b] 「日本語訳注 (4)」105 頁に示されている。

133) pāy-gāh。D126; Or. 9662, fol. 87b は PYKAH と綴るが、Or. 9660, fol. 74b の PAYKAH による。

134) この即位儀式に類似する事例について、小松久男「アンディジャン蜂起とイシャーン」『東洋史研究』第44巻第4号、1986年、17-18頁参照。

135) ruḡṣat。D126 は RVḡṢT と綴るが、Or. 5338, fol. 70b; Or. 9660, fol. 74b の RḡṢT による。

136) D126; Or. 5338, fol. 70b は「ベシュケリムのハーキム、ニヤーズ・ベグ、ファイザーバードのハーキム、ムハッラム・ベグ」と記すが、Or. 9662, fol. 87b による。本書 [p. 91 / fol. 46a] 「日本語訳注 (4)」92 頁も参照。清朝征服後のことであるが、清朝史料 (『平定準噶爾方略』続編、巻4、『清高宗実録』巻616、いずれも乾隆25年7月甲寅の条) でも、牌租阿巴特 (ファイザーバード) 阿奇木伯克 (ハーキム・ベグ) の呢雅斯 (ニヤーズ) が言及されている (佐口透『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』165頁参照)。

さて、この軍を予め点検してみると、あたかも〔この〕¹³⁷⁾ 城市から別の城市に引っ越して、移動するたびに朝から晩まで揺れ動いているかのように、最良に装備して出ている。【p. 133 / fol. 67a】「このような重々しきで目的地に着くことはできない。何故ならば、敵にも決して対抗できないからである」と相談して、「各人は身軽になるように」と命じた。軍は軽装になったようにした。〔しかし〕実際には軽装にならなかった。結局のところ、宿場¹³⁸⁾を通過し、アクサイ (Aq-sāy), カクシャル (Qāqšāl) を経て¹³⁹⁾ ウシュ城市に近づいた。

さて、物語 (ammā dāstān)¹⁴⁰⁾。

〔ウシュ城市において〕ホージャ・ブルハーン・アッディーンは知らないままであった。歓楽にひたっていた。〔次々に〕¹⁴¹⁾ 人が来て、「カシュガルの方から大軍が現れた」と知らせた。この知らないままの状況で、この軍の名を聞き、正気が失せた。人が出て、いくつかの布切れの旗を見た。それぞれは千人の印。ホージャ・ブルハーン・アッディーンは正気に戻り、兵を集める¹⁴²⁾ 準備をした。

〔以下、日本語訳注 (6) に続く〕

137) Or. 5338, fol. 70b; Or. 9660, fol. 75a; Or. 9662, fol. 87b による補遺。

138) manzil marāḥil. D126 は marāḥil を MRAḤLH と綴るが、Or. 5338, fol. 71a の MRAḤL による。

139) 現代の地図によると、アクサイ川は、カシュガル北方の天山山脈中に位置するチャティル・キョル湖東方の山地から流れ出す川であり、途中カクシャル、タウシュカンダリア (カクシャル) と名を変えウチュ (ウチュトウルファン) を経てアクスの方へ流れていく。つまり、この軍はカシュガルからトルガルト峠 (標高 3752m) を北に越えてアクサイ川に出て下流 (東方) へと進んだと思われる。

140) Or. 9660, fol. 75a; Or. 9662, fol. 88a は「物語の章。聞かねばならない」と記す。

141) Or. 9660, fol. 75a; Or. 9662, fol. 88a による補遺。

142) jam' äylämāk. D126 は jam'ī äylämāk と記すが、Or. 5338, fol. 71a; Or. 9660, fol. 75a; Or. 9662, fol. 88a による。